



ファレと変な魔法使い

みずきあかね

昔々あるところに、小さな国がありました。そこでは人間と妖精が仲良く暮らしていました。魔法使いと呼ばれる人達は妖精の力を借りて魔法を使うことができました。中でも力が強い魔法使いは、妖精を使役して国を守護していました。

昨日までの雨があがってすごくきれいな青空。廊下の窓から見えるお庭も露でキラキラしていますわ。さて。主寝室の大きな扉を力いっぱい押して中に入ると、窓際にある椅子を踏み台にして分厚いカーテンを開けます。お部屋に朝の光が入ったら、眠ってるグレン様のベッドにぽふんとダイブ。

「グレン様、朝ですよお」

ゆさゆさと体を揺ると、大きな手が伸びてきて頭を撫でてくれました。嬉しいのですが、せっかく整えた髪が乱れちゃいますわ。

「ファレ、おはよう」

「おはようございます。グレン様」

グレン様は王様に仕える誇り高き魔法使いのお一人。ワタクシはグレン様にお仕えする妖精の一人。今は人間の子どもの姿だけ。

さあお食事の仕上げをしなくては。他の食事はコックのおじさんが作るけど、朝の卵料理だけはワタクシがお作りしますの。食堂奥にあるキッチンのかまどに残っていた火をちょっと大きくして、ボウルに割り入れた卵と調味料を手早く混ぜてフライパンに流し入れて、グレン様が大好きなふわふわスクランブルエッグをお作りしていると、グレン様がいらっしゃった。今日も凛々しいお姿にワタクシ感激です。それに素敵なお召し物。まっ赤な長い髪の色が映える漆黒と銀糸の縁取りがある服。なんて素敵なの。でも見とれてはいけないわ。スクランブルエッグをさっと皿に移して野菜を飾ってグレン様にお出ししました。

「お、今日もうまそうだ。特に玉子が」

まあ、グレン様ったら本当のことを！ 頬が熱いですわ。でも卵料理を見てからグレン様は浮かない顔をされている。もしかして、

「オムレツがよかったのですか？」

「いや、これで大丈夫」

大丈夫とおっしゃったのに、グレン様は眉間にしわを寄せられ悩ましげです。

「ファレ、今日からしばらくライマの面倒を見てやってくれないか？ あいつまた痩せたんだ」

ライマ様はグレン様と同じくこの国を守護する魔法使いのお一人で、グレン様のお友達。一度だけお会いしたことがありますわ、ぼろぼろの黒いローブに瓶底眼鏡の変な恰好をされたお方でした。眼鏡の奥には覇気のない半開きの目をしていて陰気で小声で話されるの。グレン様はどなたにもお優しいけど、あんな変な人のどこがいいのかしらと思っていたのに、その方の所に行くと？ まさか、

「ワタクシのことがおきらいになったのですか？」

そんなのいや。泣きそうになってエプロンのすそを持ち上げて噛んでいたら、
「違うよ。ファレの力が必要なんだ。頼む。ライマを助けてやってくれ」
ま、まあ！ ワタクシを頼りにしてくださるなんて！
「グレン様、グレン様のためならワタクシ、どんな変な人でも耐えてみせます！」
グレン様の笑顔に勝る物なしですわ！

朝食の後始末を終えたワタクシはグレン様と一緒にライマ様のお家にうかがったの。グレン様のお屋敷はとても居心地がよい屋敷だったけど、ここのお庭は荒れ放題、雑草は生え放題で庭木は伸び放題。こぢんまりしたお屋敷の窓は蔦で覆われて中が見えないの。ここ、使用人がいないんだわ。

「ライマ！」

グレン様が呼び掛けると、重そうに扉が開いて中から微かな闇の気配を纏った黒い塊が出てきたけど、これ、人間なのかしらと思っていたらグレン様がおっしゃったの。

「この前話したファレだ。今日から住み込ませるからファレのことを頼む。ファレもライマのことを頼んだぞ」

ワタクシはライマ様に丁寧にお辞儀したの。

「よろしくお願いします」

ライマ様はちらっとこっちを向かれて、小さい声で「こちらこそ」って言ったの。グレン様は少しライマ様とお話しになってから、お帰りになりました。

グレン様。少しの間留守にしますが、朝はちゃんと起きてくださいね！

ライマ様はワタクシをお屋敷入れてくださったんだけど、あまりの酷さにびっくり。扉を開けた途端に何かが腐った臭いとカビの匂い。床は埃が積もっていて足跡ができちゃう。案内されたそこかしこにゴミと一緒に服が落ちていたし、どう表現すればいいかわからないくらいのキッチンの悲惨さといったら！ この方、何もできないのね。

「あの、ライマ様、私はどのお部屋を使わせていただけるのでしょうか」

だって住み込みで働くなら自分の寝るところは確保したいもの。一応レディですし。するとライマ様は一瞬きょとんとされて、顔が真っ赤になった。

「あ、部屋か、考えてなかった」

ぶつぶつ呟いて隣の部屋に行かれました。まって。ここはもっと汚い。壁の左側は本で右側の壁の棚にはビンの中に入った何かや箱が埃と蜘蛛の巣ですごいことになってる。

「ここでいいかな？ 物置なんだけど」

こ、このワタクシを物置に寝かせようなんて。燃やしてしまおうかしら。

「ライマ様、ここを片付けますから、いる物といらぬ物を分けてください」

お願いすると、ライマ様はしばらく物置の棚を眺めていたけど、

「全部いる場合は、どうしたらいいのかな？」

な、なんですって？

「ここはワタクシがこれから寝泊まりするお部屋ですよ？ このきったないところをきったないままにして暮らさなくちゃいけないんですか！」

「わわわかった。別の部屋を用意するまでは、僕の寝室でいい？」

物置よりマシかも期待をしていた寝室も、完璧なまでに汚していらした。

「ここはあまり汚れてはいないから、掃除はしなくても」

「念入りにお掃除させていただきますわ！」

「ちょ、ちょっとまって！」

さっきの物置の隅で埃をかぶっていた正体不明の布きれを引き裂いてはたきとぞうきんに。「それは」って声がしたけど聞こえません！ 窓辺の邪魔な蔦は切って窓を全開にして、窓枠や食器棚にはたきをかけると、見事な埃で前が見えなくなっちゃった。けほけほと咳が聞こえる方を見たら、呆然としているライマ様の黒マントに埃がどんどん積もってグレーになりそう。

「掃除が終わるまで、入らないでください」

ライマ様は家の外に出ていただきました。

埃を外に追い出して、壊れかけのモップで床を拭いたら、少しは見える床になりましたわ。次に壮絶だった流し台の中を使えるようにしました。寝室のよれよれシーツと部屋の隅にある服の山の中から見えそうな物を洗濯して外に干してその辺にいた風の妖精と火の妖精に頼んで湯かしてもらったわ。

ライマ様はワタクシの後ろをずっとついて回っていました。勝手に物を捨てられては困ると思ったのね。本当は捨てたいけど、ゴミ以外の見えそうにない物は、物置に入れました。

夕食はあらかじめ持って来た野菜で具だくさんのスープとパンを召し上がっていただきました。「これは苦手」なんて言葉は聞こえません。好き嫌いなんて許しませんわ。

食事の始末をして寝室に行くと、ライマ様は寝間着用なのかしら？ 黒い布にくるまってベッドに腰掛けていました。

「ベッドがないから、一緒でかまわない？」

レディとしてははしたなくていやだけど、急だから我慢しよう。でも何故このお屋敷はこんなに荒れているの？ どうして今まで人を雇わなかったの？ ライマ様はグレン様と一緒に王様にお仕えしてるのだから、それなりのお給金をいただいているはず。

いろいろ考えていたら、黒い布の奥から寝息が聞こえてきた。おつかれでしたのね。

その時、ライマ様の中から漂う闇の気配が濃くなった気がしたけど、落ちてきたまぶたには勝てなかったの。

次の日もお掃除とお洗濯の続きです。

掃除の間、ライマ様はずっとワタクシの後ろを付いてきました。もう。何も捨てませんよ。それから、市場でいろんな物を仕入れることができたので、きちんしたとお食事も取っていただきました。具だくさんのスープはもちろん、パンにお肉にサラダにデザートまで。抜かりはありませんわ。昨日より食事の文句が多い気がするけど、今まで食事を怠っていた方に文句を言う資格

はありませんわ。

数日すると、ライマ様は少し顔色が良くなってきました。お屋敷もお掃除の成果が出て明るくきれいになってきましたのよ。そして、ライマ様が一人で生活できるようにお掃除やお洗濯やお料理を少しずつお教えして一日が終わるの。今日も充実した一日でしたわ。

二人でベッドに入ると、ライマ様は黒い布の奥からやわらかな表情が見えました。もしかして今のは笑顔？

「ねえ。君のことを教えて。どこで生まれたの？」

あらワタクシとグレン様のなれそめにご興味が？ 是非聞いていただきますわ。

「ワタクシは蠟燭の火から生まれました。その時目の前にいらっしゃったのがグレン様なの。グレン様はおっしゃいました。『小さなレイディ。生まれたての君と是非契約したいんだ』って。契約の証として私にキスをしてくださったその時よ。生まれたてでは契約しても魔力が落ち着くまでは人の姿になれないのに、ワタクシは変化したのよ」

本当はグレン様と釣り合うような美しい女性が良かったけど。

「仲良しなんだね。君は火の妖精なのに水が使えるよね。妖精のままだと水をさわっただけで消えてしまうのに、恐くない？」

「人間の姿ですから大丈夫です。それにお掃除もお洗濯もお料理も、グレン様のためならなんでもして差し上げたいのですわ」

胸を張って宣言したのに、ライマ様はワタクシのお話の途中でとろとろとお眠りになってしまいました。ワタクシも、まぶたを閉じたわ。

身も心も黒くとろけそうな闇の中、金髪にまっ白なマントの魔法使いは、雷の妖精と共に背中合わせに立っていた。闇の妖精達が彼らをじっと伺っている。

雷の妖精は自らを光らせ、主人を見た。金の刺繍が施された白いマントが闇色に染まっていく様子が見えたけど、魔法使いはまだ強気で、声を張り上げた。

「私が闇の力に負けるなどあるものか」

その声とは裏腹にカタカタと防具がふるえて情けない音を立てている。恐怖を垂れ流す人間は闇の妖精達の格好の獲物だ。

「ああ……甘美」

闇の中、たくさんの妖精達の気配の中で、最も大きな存在がほくそ笑む。

「夢魔よ、もう観念して私と契約するんだ」

「いやよ、だってあなた弱いじゃない」

夢魔は闇の手でするりと頬を撫でたとたん、魔法使いは地面に這いつくばって悲鳴を上げた。黒く染まったマントを染めた闇が見事な金髪を染めていく。

「声なんか上げてみっともない。弱い人に用はないわ」

雷の妖精は彼を残して消えた。

そんなのってないわ。勝手に契約を破棄するなんてありえない。雷の妖精はライマ様を好きじゃなかったのかしら。

ワタクシは闇に飲み込まれそうなライマ様の側に歩み寄る。何かを呟きながら膝を抱えるライマ様の周りを漂っているのは悪夢だわ。夢魔の夢は風邪のように広まっていくって聞いたことがある。ワタクシ、ライマ様の夢を見ているのね。

「この夢は、夢魔のせいなんですか？」

彼は闇を纏った顔を上げて私を見ると、びっくりした顔をされて、

「君、大丈夫？」

と気遣ってくださったの。

「大丈夫ですわ。でもどうしてこんなことに？」

ライマ様はまた下を向いてしまいました。

「夢魔と契約を結ぼうとしたら、呪いを掛けられたんだ。雷の妖精も呆れて何処か行ってしまった。帰ってきてからも悪夢は止まなくて、それだけじゃなくて使用人達が悪夢を見るからと言ってどんどんやめていって、今は君だけ」

ライマ様はワタクシに手を伸ばされたの。手を握って差し上げると、きゅっと握り返されて安心したように笑った。

「君の手は小さいけど、温かい」

「火の妖精め。お前ごときに何ができる」

夢魔の声がする。同時に心の中に思い出すのも恥ずかしい数々の失敗やグレン様の困り顔が頭をよぎった。これが悪夢？ 効かないわ。だって、そんな失敗よりグレン様と一緒にいる方が大事なんですよ。

「この方は諦めてくださらない？ グレン様のご友人なの」

ライマ様と私の両手の中に聖なる火を灯す。柔らかい光がワタクシとライマ様を照らし出した。ライマ様ったらこんなに闇にまみれて。大丈夫。ワタクシがお救いしますわ。

「ワタクシが生まれた火は、聖なる神殿の蝋燭の火。少しの闇なら払えますのよ」

小さな炎は光を増して、辺り一面を照らし出す。

闇達は光に消され、夢魔の気配も消えるとライマ様から闇の気配は消えた。

闇に染まった黒いマントは白地に金糸にもどっていく。

ライマ様は地面に手を突きながらすっと立ち上がりました。あら、意外と背がお高い。自らの姿をまじまじと見つめていらっしゃるこの方は、ワタクシが知ってるライマ様じゃありませんわ。きらびやかな衣装に美しく輝く瞳。流れる金髪が白い肌によく映えて。グレン様よりもこの方、美しいかも。お二人に並んでいただいて一日中眺めていたい！

「僕は、なんてつまらないことで悩んでいたんだろう。ありがとう。で、その、あのことは、見えたの？」

あのこと、というのは、悪夢の中に見えた、ライマ様が幼少の頃の頃に起こった恥ずかしい出来事でしょうか。

「それについては、誰にも内緒にしておきますわ」

ライマ様はちょっと恥ずかしそうに、ワタクシの頭をくしゃくしゃと撫でられました。もう、また整えなくちゃ。ですわ。

目が覚めると、目の前に美しい青年がいてびっくりした。誰？

「おはよう。僕の光。僕の魂に語りかけてくれた女神様」

この人いきなり抱きしめて、きた。ぎゃあああ。思い切り両手で胸元をぐいっと押したら、

「こんなことをしていいのは、グレンだけ？」

朝からなんて魅惑的な声！ でもこの屋敷にはワタクシの他には、まさかこの方、

「ライマ様、ですか？」

だってライマ様って黒いローブで瓶底眼鏡で変な人だったはず。

「君のおかげで夢魔の呪いがとけて、すごく気分がいいんだ。ありがとう」

はあ。お笑いになる顔もきらびやかですわ！

「ねえファレ。僕のものにならない？ これからも僕と一緒にいてくれると嬉しいな」

またぎゅっと抱きしめられた。ワタクシを口説こうなんて！ 一瞬揺らいじゃったけど。お顔に騙されてはいけないわ。だってこの方は、何もできないライマ様なのよ？

ワタクシは息を整えて冷静に言いました。腕の中だけど。ドキドキするけど。

「ライマ様はもっとご自身のことをきちんとできるようにならなくてははいけませんわ」

「じゃあ、できるようになるまでいてくれる？」

輝く瞳があまりにも美しいので思わず頷いてしまいましたが、ワタクシは、グレン様のもの、ですからね！ この先もずっと。きっと。

.....うん。

お昼頃、グレン様がライマ様のお屋敷に来られたの。グレン様はワタクシを見つけて、
「ファレ」

って微笑んでくださったの。

「グレン様！」

思わず飛びついてしまいましたら、ライマ様が後ろからワタクシの手をひっぱって、気がついたらライマ様の腕の中でした。あれ？

「グレン。君の炎はとても役に立ったよ」

何故か意地悪そうにお笑いになるライマ様とは対照的に、グレン様はひどくご機嫌斜めなご様子。こんなお顔のグレン様は初めてですわ。なんて険悪なムード。とりあえずお茶をお出ししなくてはと、ライマ様の腕をすり抜けて、お二人をリビングに案内しました。キッチンでお湯を沸かして、茶器を出して、昨日焼いておいたおやつのクッキーをお皿に盛った。お茶を煎れてクッキーと一緒に持ちましょう。今頃グレン様とライマ様はお話をしていらっしゃるはず。ライマ様があの黒いマントも瓶底眼鏡もなくなっていたから、びっくりされていたし。よかったわ。ほんと。お盆に二人分のお茶とクッキーを乗せて、リビングへ入ると、すごく静か。まさかあのまま一言も？ そう思っているとワタクシに気がついたグレン様はにっこりと微笑まれました。ライマ様とグレン様の前にお茶をお出ししていると、グレン様がワタクシに声をかけてくださったの。

「ファレ。本当によくやってくれたね」

ええ、がんばりましたわ。だってグレン様のためですもの。そう言おうと思ったけど、その前にライマ様が、

「ねえ、グレン」

グレン様は全部聞く前に、

「だめ」

すごくこわい顔をされました。こんなこわいお顔も初めて。ドキドキしますわ。グレン様ってずっとニコニコしていると思いましたのに。

「ファレにはまだ、ここにいてほしいんだ。ファレもその方がいいって。ね？」

にっこりお笑いになりましたので、ワタクシもにっこり……。は！ また釣られてしまいましたわ。ワタクシ、ずっとここにいたいなんて、そんなこと少しも考えていませんわ。思わず熱くなる頬を両手で押さえていると、グレン様がふかあいため息をおつきになりました。

「だから嫌だったんだ。ファレは力がある人間を好きになりがちだから」

ぼそりとグレン様が呟かれるのをワタクシ聞き逃しませんでしたわ。なんてことを。それではワタクシが浮気者みたいじゃないですか。ワタクシはグレン様一筋です。ただ魔法使いの皆様がすごく素敵なのですわ。

「お優しいことだな。相変わらず」

グレン様はライマ様とにらみ合いに。本当は仲がお悪いのかしら。

「夢魔にやられて落ち込んで痩せていくのを見ていられなかったんだよな？ 屋敷の人間に捨てられて仕事もうまくいなくて屋敷から出ることも出来なくなった僕を」

ライマ様、グレン様に微笑まれるけど、すごくこわい。

「絶対に外に出したくなかった自分のお守りを単身寄越すくらい、気になった？」

「あの、どういうことですか？」

グレン様がワタクシのことを絶対外に出したくないって、本当かしら。もし本当ならどうしましょう！

「実は君が誕生したときは僕もいてね」

ほほほんとですか？ じゃ、じゃああの方は？

「小さなレイディって言ったの、僕」

ええええええ！？ た、たしかに今のライマ様なら言いかねない。ずっとグレン様がおっしゃってくださったと思っていたのに、なんだかショック。

「神職以外は絶対に立ち入り禁止になってる神殿と一緒に忍び込んで、君が誕生するのを見届けたんだ。すごく神秘的な現象だった。すごく可愛かったから僕がもらおうと思っていたのに、絶対だめって譲らなかったんだよ。そのくせ君に着せる服のこととか女の子の扱い方とかを聞いてきて」

グレン様は大きく息をつかれて、

「ああそうだよ。あの時は世話になった」

って認められた途端に、勝ち誇ったようにライマ様は笑った。……ライマ様、性格悪い。

グレン様はワタクシを手招きされました。グレン様のおそばに行くと、グレン様はぎゅっと抱きしめてくださいました。

「でも今は俺の物だ」

ふわああああっ、なんて、なんてお言葉。グレン様大好きですわ。グレン様の背中に手を回してぎゅってしていると、ライマ様は、なんとも寂しそうな顔をされて、

「よかったね。グレンが迎えに来てくれて。グレンと一緒に帰りなさい」

そうおっしゃいました。でもライマ様は大丈夫なの？ まだお教えすることたくさんございますのに。お食事もちろんとご自分で出来るのかしら。なんて言う暇もなく、ワタクシとグレン様はお屋敷から追い出されてしまいました。

帰り道、しばらくグレン様は無言でした。

「あの、グレン様」

ライマ様とはお友達じゃなかったの？ そう聞こうと思ったのに、グレン様が先にお話しになりました。

「あいつとは同郷なんだ。私が炎の魔法を得意とするように、あいつは闇と雷の魔法を得意とする。闇の妖精と戯れ、闇魔法を取得するにつれてひねくれてしまったが、本当はいいやつなんだ」

「でも、グレン様に失礼なことをたくさんおっしゃいましたわ」

「あれはライマなりの精一杯の感謝の気持ちだよ。私にしか通じないけどね。ライマの屋敷には人を手配するから、もう心配しなくていい」

でもまだライマ様はまだお一人にしてはいけない気がするの。だってすごく寂しそうな顔をされていらっしやいましたもの。後ろ髪を引かれながら、ワタクシはグレン様のお屋敷に戻ったのでした。

それから何日か経って、ライマ様がお仕事に復帰なさって、活躍をされているとグレン様にお聞きして、ほっとしていました。よかったですわ。グレン様が手配なさった使用人達もちゃんと働いていると聞きましたし。でも町でお見かけしたライマ様は、ワタクシに気がついても他人行儀な挨拶をされるだけでした。きっと瓶底眼鏡のライマ様は、違うライマ様なのね。とても寂しい気持ちになってしまいましたわ。

いつものようにグレン様に朝をお知らせして、いつものように卵料理をお作りして、本当にいい朝ですわ。今日も一日よい日になりますように。

グレン様がテーブルにお付きになるのと同時に料理をお出しする。今日も美味しそうって言うてくださると思っていたのに、グレン様は渋い顔をされました。

「あ、あの、今日はオープンオムレツじゃないほうが……」

ドキドキしながら聞くと、

「ファレ、午後一緒にライマの所に行ってくれないか」

え？ライマ様に何か？ ま、まさかあれだけががんばりましたのに、もうお屋敷が汚くなってしまいましたの？

午後、ワタクシはグレン様と再びライマ様のお屋敷を訪ねました。お屋敷はきれいなまま。ほっとしてしばらくすると、ライマ様が扉を開いて、うっとりとするような美しいお顔で微笑まれました。

「グレンじゃないか。何か用？」

「ああ。少し、いいか？」

グレン様が厳しい顔でそうおっしゃいましたので、ワタクシもご挨拶。

「ライマ様、ご無沙汰しております」

にっこり笑うと、ライマ様の顔が固まっちゃって。ワタクシ、歓迎されてないのかしら。

それより微かだけど、たしかにあの時の闇の匂い。悪夢の残り香。

「グレン様」

マントの裾をきゅっと掴むと、グレン様はワタクシの肩に手を置いてくださいましたの。

「ライマ、まだ悪い夢を見ているのか？ うちの使用人が、お前が夜中にうなされているという噂があると言っていたのだが」

そ、そんな。だってワタクシあの時ちゃんと闇を払いましたのに。

「グレン様、ワタクシ、闇を払うのに失敗したんですの？」

まさかこのワタクシが、あの程度の闇を払うのに失敗するなんて。グレン様はワタクシの肩に乗せてくださった手に力を込められましたの。

「いや。ファレはよくやってくれたよ」

「でも！」

失敗したことには違いないわ。

「ああ。ファレはよくやってくれた」

ライマ様は、あの黒いマントの奥で見せた、ちょっと困った顔をされた。あ、ワタクシがお世話したライマ様のお顔だわ。そう思っていたら、ライマ様は膝を折られてワタクシの手を取りましたの。

「僕がこだわっているだけなんだ。僕に愛想を尽かせて消えてしまった雷の妖精のことを考えると、どうしても眠れなくて。それまでは仲良くやっていたから」

そのお顔をされるとちょっと弱いんですよ。ワタクシ。

「ファレの前では素直なんだな」

ライマ様は、恥ずかしそうに顔を赤くされて。グレン様もライマ様には容赦ないのですね。

「ファレ。どこにいるか、わかるか？」

「お探ししますわ」

小さな聖なる炎を両手の中に灯して、集中。

このお屋敷の中、すぐそばに、かすかな、雷のチリッとした気配。

ああ、そんなところにいたの。

ライマ様の影の中。必死に訴えてくる。ずっと一緒にいたのに、どうしてライマ様は気がついてくれないのかしらって。きっと夢魔の闇が濃かったせいね。

「ライマ様。彼女は夢魔の悪夢に飲まれる前に、ライマ様の影に閉じ込められたそうです。出して差し上げて」

ワタクシでもできますけど、それは彼女が望みませんわ。

ライマ様は自分の下にある影を見つめて、影に右手をかざしたの。するとチリチリと手の平から小さな雷が出てきて、それがだんだん明るくなって、影が消えた。と同時に、あの夢の中で見た雷の妖精が現れたの。なんてお似合い。ワタクシとグレン様とは違って、背の高さもちょうどいい感じ。

「ライマ！」

出てきた雷の妖精は、右手を振り上げていきおいつけてライマ様の頬をグーで殴った。グーで。すごい音がして、ライマ様は床に転がった。なんて、痛そうなの。

「こんんの、浮気者！ こんな小さい子に何口説いてるの！ 私っていうものがいながら！」

今度はライマ様に馬乗りになって、両手でぎゅーぎゅー美しいお顔を潰して……。

「ごごみえん」

「謝って済むか！ もう絶対許さないんだから！」

そのまま口づけて……んまああああって目を丸くしていたら、グレン様に両目を覆われてしま

いました。もうちょっと見ていたいのに。

「帰ろう。ファレ」

「はい」

帰り道、グレン様はやっぱり無言でした。なんもおっしゃらないので、ワタクシはたまらず話しかけました。

「グレン様。ワタクシ、失敗いたしましたのね」

あれくらいの影なら、消せると思っていたのに。恥ずかしいですわ。

「きっと彼女は、ライマ自身に見つけて欲しかったから、見つかるまで隠れていたんだろう」

そうかしら。でも、そうね。きっと。もし何処かに閉じ込められて、助けに来たのがライマ様の妖精だったら、ちょっとがっかりするかも。

「グレン様。ワタクシがもし、どこかに閉じ込められてしまったら、グレン様は助けに来てくださいます？」

そして、あんな風に熱烈に口づけしてくださるかしら。あ、逆。ワタクシの口づけを受けて下さるかしら。ドキドキながら答えを待っていましたが、グレン様はワタクシの問いにはお答えになりませんでした。そのかわり、

「明日はオムレツがいいな。チーズがたっぷりの」

そしてとてもきれいな笑顔で微笑まれたの。んまあ、ワタクシにはもったいないくらいの眩しい笑顔。

「チーズオムレツですね！ まかせてください！」

とびっきりおいしくなるように、ワタクシがんばりますわ！

だって大好きなグレン様のためですもの。

おしまい